

司馬遼太郎と吉野にまつわる年表

和暦	司馬遼太郎の吉野にまつわる出来事
大正12年	誕生。虚弱体質のため、母方の叔父が大峯に願かけする。3歳迄當麻町に住む。
昭和2年	吉野行の電車で、道明寺駅で車掌が電車に乗り遅れるのを見る。
昭和11年	中学1年の時、奈良県の母方の叔父に連れられて十三詣で（山上参り）へ。
昭和18年	成人。この年迄に4度大峯山を訪れる。
昭和19年	友人3名と下市口に集合。吉野山から大峯山に登る。熊野に向かうが、9日間山をさまよひ、高野山に辿りつく。
昭和20年	終戦。大阪で記者になる。
昭和23年	産経新聞社入社。
昭和24年頃	青木幸次郎の紹介で、大淀出身の童話作家・花岡大学と西本願寺で会う
昭和25年	「『国宝』学者死す」掲載。
昭和26年頃	友人に連れられ、花岡大学宅へ向う。
昭和28年	「饅頭伝来記」を掲載
昭和29年頃	花岡大学の家に向う。
昭和31年	「睡蓮と仙人」を掲載。 「菊の典侍」掲載。
昭和32年	同人誌『近代説話』を創刊。花岡大学、黒岩重吾、永井路子、尾崎秀樹ら参加。
昭和34年	『泉の城』で直木賞を受賞。 「神々は好色である」を掲載。 「泥棒名人」を掲載。
昭和35年	「庄屋衝稻荷」を掲載。 『風の武士』を連載。
昭和36年	「八咫鳥」を掲載。
	昭和19年体験談を「無銭旅行」に記す。
	産経新聞を退社。
	「大衆と花とお稻荷さん」執筆。
	「山伏の里」に十三詣でや、21歳の時に前鬼へたどり着けなかったと記す。 「おお大砲」を掲載。
昭和37年	「冷泉斬り」を掲載。
	「芹沢鴨の暗殺」を掲載。
	「三友消息」を執筆。四国山脈～高知の遍路道を歩き、十津川街道を想起する。

和暦	司馬遼太郎の吉野にまつわる出来事
昭和38年	「伊賀者」を掲載。
	「祇園囃子」を掲載。 「国盗り物語」を掲載。 『竜馬がゆく』刊行
昭和39年	「五条陣屋」を掲載。 「お庭拝見」に「庭に吉野山などのスキを植えてもらった」と紹介。
	昭和41年 『国盗り物語』刊行。
昭和42年	湯川秀樹との対談が載る。（『この国のはじまりについて』に再録）
昭和43年	『義経』刊行。 『峠』を刊行
昭和44年	岡潔と対談。（『萌え騰がるもの』収録）
昭和46年	『街道をゆく1』刊行。 『街道をゆく4』刊行。
昭和48年	十三詣での事を「密教世界の誘惑」に記す。この経験が作品に影響したという。
昭和49年	誕生日に富士登山。十三詣を思い出す。 富士山登山を「富士と客僧」に記す。 花岡大学宅へ伺った事を「人と作品-とくに花岡大学の風韻について」に記す
	昭和50年
昭和51年	松下幸之助との対談が載る。（『土地と日本人』に再録） 『空海の風景』余話』に、昭和17年頃に高野山を訪れたと記す。
昭和52年	『街道をゆく8』刊行。
昭和55年	『街道をゆく12』刊行。
昭和56年	『ひとびとの足音』刊行。4歳の時に電車で吉野へ向かう際の思い出を紹介。 『街道をゆく15』刊行。
昭和57年	『街道をゆく18』刊行。
昭和60年	『街道をゆく26』刊行。
平成元年	花岡大学宅へ伺ったと追悼文に書く。
平成5年	文化勲章を受章。
平成8年	国立大阪病院で亡くなる。



司馬遼太郎生誕 100周年記念

司馬遼太郎の活動と執筆

～吉野との関係に焦点をあてて～

企画・展示：吉野歴史資料館 会期：令和5年8月5日～11月26日 イラストACを利用しています。

1. はじめに

今年は、小説家として名をはせた司馬遼太郎（本名：福田定一）の生誕100周年にあたります。司馬遼太郎は昭和後期を代表する小説家の一人で、歴史小説を積極的に執筆しました。特に晩年の作品には、「司馬史観」とよばれる独自の歴史観が随所にみられ、多くの読者を魅了しました。司馬史観の是非は、今も問われ続けているところですが、今日でも多くの方に知られる有名な歴史作家の1人と言えるでしょう。

ところで、みなさんは司馬遼太郎が吉野と“縁”があったことをご存じでしょうか。この縁は司馬遼太郎の幼少期にまでさかのぼり、とくに十三詣で（山上参り）の時に見た不滅の灯は、「妖怪」などの作品に影響したといえます。この展示では、司馬遼太郎と吉野の縁を紹介するとともに、氏が吉野（吉野郡域をふくむ）を取り上げた作品をご紹介します。

【本陳列の出品リスト】

新聞記者 司馬遼太郎	文庫 個人	司馬遼太郎短編全集	1巻	単行本 個人
司馬遼太郎の風音	単行本 個人	司馬遼太郎短編全集	2巻	単行本 個人
司馬遼太郎が考えたこと 2巻	文庫 個人	司馬遼太郎短編全集	4巻	単行本 個人
司馬遼太郎が考えたこと 7巻	文庫 個人	司馬遼太郎短編全集	7巻	単行本 個人
司馬遼太郎が考えたこと 8巻	文庫 個人	司馬遼太郎短編全集	12巻	単行本 個人
司馬遼太郎が考えたこと 9巻	文庫 個人	街道をゆく 1		文庫 館蔵
司馬遼太郎が考えたこと 14巻	文庫 個人	街道をゆく 4		文庫 個人
義経	文庫 個人	街道をゆく 8		文庫 個人
空海の風景	文庫 個人	街道をゆく 12		文庫 個人
峠	文庫 個人	街道をゆく 15		文庫 館蔵
ひとびとの聲音	単行本 個人	街道をゆく 18		文庫 館蔵
国盗り物語	文庫 個人	街道をゆく 26		文庫 館蔵
風の武士	文庫 個人	萌え騰がるもの		その他 個人
巢の城	文庫 個人	二十一世紀に生きる君たちへ		絵本 個人
吉野風土記 6巻	雑誌 館蔵	司馬さんを語る		文庫 館蔵

2. 司馬遼太郎の吉野ゆかりの作品（「」は短編、『』は長編）



司馬遼太郎作品では、以下の作品で作中に吉野が出てきます。

テーマ	タイトル	刊行年	テーマ	タイトル	刊行年
【神話】	「神々は好色である」	1959	【江戸】	『風の武士』	1961
	「八咫鳥」	1961		「おお、大砲」	1961
【役行者】	「睡蓮と仙人」	1956	【幕末】	「伊賀者」	1963
	「泥棒名人」	1959		「『国宝』学者死す」	1950
【平安】	『義経』	1968	「庄兵衛稲荷」	1960	
	『空海の風景』	1975	「冷泉斬り」	1962	
【南北朝】	「饅頭伝来記」	1953	「芹沢鴨の暗殺」	1962	
	「菊の典侍」	1956	「祇園囃子」	1963	
【戦国】	『泉の城』	1959	「五条陣屋」	1964	
	『国盗り物語』	1966	『峠』	1968	
	「城の怪」	1970	『竜馬がゆく』	1986	

3. 司馬遼太郎と吉野のつながり

吉野でのエピソードを随筆で書いたり、対談や『街道をゆく』で吉野を紹介したりしています。

「無銭旅行」(1961)

下市口から熊野に歩こうとした話を紹介

「大衆と花とお稲荷さん」(1961)

大衆文化を花見に例えて紹介する中で、吉野山の花見を話題の一つにしている。

「三友消息」(1962)

遍路道を歩き十津川を思い出したと紹介。

「山伏の里」(1961)

十三詣でのことや、21歳の時に前鬼に辿り着けなかった思い出を紹介する。

「お庭拝見」(1964)

吉野山等のスキを庭に植えたと紹介。

「人と作品-とくに花園大学の風韻について」(1974)

花園大学宅に2度伺ったと話題にする。

「富士と客僧」(1974)

富士登山時、十三詣を思い出したと紹介。

「密教世界の誘惑」(1973)

十三詣でのことを話題にする。この時見た不滅の灯が「妖怪」などの作品に影響したという。

『空海の風景』あとがき(1975)

十三詣でのことや、それ以降20歳までの間に4度大峯山に登ったことを話題にしている。

『空海の風景』余話(1976)

昭和17年頃に高野山を訪れたと紹介。

『ひとびとの聲音』(1979)

4才の時、吉野行き電車での体験を紹介する。

「花園大学の追悼文」(1989)

花園大学宅へ伺ったことにふれている。

司馬遼太郎は、様々な方との対談で吉野の話題を取り上げています。

【対談】

湯川秀樹との対談(1967)

役行者等の話題が出る。

岡潔と対談(1969か)

国栖の話題が出る。

松下幸之助と対談(1976)

吉野杉が話題に出る。

司馬遼太郎の人気シリーズ『街道をゆく』では、折に触れ吉野のエピソードが紹介されました。

【街道をゆく】

『街道をゆく 1 湖西のみち、甲州街道、長州路ほか』

古来、吉野の人々は国栖と呼ばれたとし、その伝統が十津川郷士まで続いたと紹介する。

『街道をゆく 4 郡上・白川街道、堺・紀州街道ほか』

隆達節（近世初期の流行歌謡）の吉野の歌や大峯山の山伏、役行者の話が紹介される。

『街道をゆく 8 熊野・古座街道、種子島みちほか』

下市口～西吉野村の記事が載る。大峯の山伏の話等紹介される。司馬にとっての大峯詣道か。

『街道をゆく 12 十津川街道』

十津川郷士の話題を中心に、吉野のエピソードを紹介している。

『街道をゆく 15 北海道の諸道』

十津川村から集団移住した新十津川村について紹介している。

『街道をゆく 18 越前の諸道』

鎌倉時代の武家屋敷を想像する手がかりとして、平泉の白木の館と吉野山の吉水院を紹介。

『街道をゆく 26 嵯峨散歩、仙台・石巻』

後嵯峨上皇が吉野山から桜を取り寄せて嵐山に植えさせたことなどを紹介する。

4. おわりに — 司馬遼太郎と吉野との関係を考える

●司馬遼太郎の吉野への意識

司馬遼太郎の吉野への意識は、大きく二つあげられるでしょう。一つは、大峯山との関わりです。下市口駅を出発して大峯山まで度々歩いた記憶は、氏の様々な作品に影響を与えました。もう一つは、幕末に吉野で活躍した十津川郷士の存在です。今日の歴史観とは異なる表現もみられますが、幕末の作品を多くのこした司馬遼太郎らしい視点といえるでしょう。

その他、大淀町出身の花岡大学との繋がりが、晩年まで吉野が関わる作品を書いているあたり、司馬遼太郎は生涯、どこかで吉野を意識していたのかもしれない。

●今もつづく司馬遼太郎の批評と顕彰 — 『司馬さんを語る』

司馬遼太郎の作品については、いわゆる司馬史観への批判などがありますが、一方で今も多くの方が氏の作品を愛読されています。司馬遼太郎が歴史小説家であることを考えると、歴史の愛好家を増やしたと言う点で、氏の功績は大きいといえるでしょう。また、今も縁のある方々によってシンポジウム（@司馬遼太郎記念館）がひらかれるなど、その顕彰は今も続けられています。

●『二十一世紀を生きるきみたちへ』より

司馬遼太郎は、私たちにに向けてメッセージをのこしています。そこには、自然との関わり、歴史上の人物（友人）たちとの語り方などが書かれています。当館も引き続き、吉野の歴史を友人のように紹介していきたいと思えます。

